

これぞ永遠の悪循環

かしま しげる
鹿島 茂

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
これぞ永遠の悪循環
鹿島 茂
- 2 特集
ペットボトルの世界
ペットボトルの世界……久保 正敏
飲料容器としてのペットボトル……峯 孝則
ペットボトルと「ラッパ飲み」……相田 満
暮らしのなかのペットボトル
—西南中国の少数民族トン族の事例から——兼重 努
ペットボトルから考える地球という器のなかの水
……中野 孝教
- 8 モノクラフ
伊勢型紙
吉本 忍
- 10 地球ミュージアム紀行
アイヌ民族博物館
アイヌ文化を伝承し紹介する唯一の総合博物館
佐々木 利和
- 11 表紙モノ語り
僧侶用水筒
栗田 靖之
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 人生は決まり文句で
「マリヤーデが欲しいのよ」
池亀 彩
- 15 時論新論理想論
「中心と周縁」はあるのか？
—イスラームの「周縁」をめぐる
映像上映会報告記—
吉本 康子
- 16 多文化をささえる人びと
外国人支援の総合商社
—在日外国人情報センター—
庄司 博史
- 18 生きもの博物誌
微生物がつくりだす日本酒
(麹菌 酵母)
岩谷 洋史
- 20 歳時世相編
仏法の島の年中行事
スリランカのウェサック祭とポソソ祭
杉本 良男
- 22 フィールドで考える
「らしさ」の多様性
津田 浩司
- 24 みんぱくウィークエンドサロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

年のうち二度引越しをした。神保町から高輪へ、高輪から西麻布へ。こう書くところから「神保町はわかるとしても、高輪や西麻布という『おしゃれな街』は似合わないじゃないか?」「意外と金もってるんだな」という反応が返るが、実情はまったく違うのである。

勤務先と古書街にも近いということ、神保町に八坪の事務所を月八万円ですりかきながら二〇〇三年のこと。当時は景気のドン底で、商業地区の古い貸しビルは坪一万円を切っていたのだ。横浜の家に溢れた本を収容できるスペースを探していたら、灯台下暗しで、勤務先の近くに見つかったというわけ

だ。ところが八坪はたちまち手狭になった。毎日のように古書を買ってくるからだ。その結果、半年もしないうちに白山通りの反対側に一四坪の事務所を見つけて引越した。二年半後、同じフロアの二〇坪へ。これにて安住の地が見つかったかと思つたが、甘かった。古書の増えるスピードにペースの増加が追いつかないのである。おかげで二〇坪も完全に手狭になった。そこで、更に広いスペースを探したところ、港区なら物件があるという耳寄りな話を聞いた。リーマンショックで高給取りの外国人が本国に引き上げ、外国人住宅の家賃が暴落しているというのである。かくして神保町から高輪

へ。去年の七月のことである。だが、ここも安住の地とはならなかった。天井が高いのと窓が多すぎるため、冬はまるで外で暮らしているようなのだ。そのせいか肺炎にかかり、入院の瀬戸際に。かくてはならじと新天地を求め、西麻布に移った次第。この間、引越すにかかった費用は馬鹿にならない。すべての元凶は本にある。本のために広い家を求め、家賃捻出のために本を書き、資料の必要からまた本を買い……これぞ永遠の悪循環。これを断ち切るには、古書買いを止めなければならぬが、それには物書きを止める必要がある。どうやらこちらも永遠の悪循環のようである。

フランス文学者。明治大学国際日本学部教授。19世紀のフランス社会・文学を専門とし、当時の風俗を活写するエッセイの他、小説、書評、翻訳など精力的に執筆活動を行っている。古書コレクターとしても知られる。96年『子供より古書が大事と思いたい』で第12回講談社エッセイ賞を受賞、99年『パリ風俗』で第51回読売文学賞を受賞。近著に『パリ、娼婦の館』(角川学芸出版)。